

## 不肖

内 田 康

今、私の目の前に、一冊の古いノートがある。表紙には『文学研究法Ⅱ』という科目名の横に、自分の氏名と「比較文化学類」の学籍番号。さらにめくった裏表紙には、「2A313、名波弘彰先生」の文字。…それはもう二十年余の昔、筑波大学に入学したばかりの私が、初めて先生の聲咳に接することになった授業の記録である。

\*

名波弘彰先生に御指導を賜った者の一人として、先生の思い出について執筆することをお受けしたものの、いざ書き始めようとすると、先生に関して記し置くべきことの多さに比し、紙幅の関係上、自分が綴り得る内容のあまりの少なさに、茫然とせざるをえない。例えば、私が博士課程文芸・言語研究科（当時）に進学して間もなく、先生が、荒木正純先生とともに多くの先生方を巻き込んで、本「筑波大学比較・理論文学会」の立ち上げ・組織化に尽力されたこと、あるいは大学院生たちのために研究発表の場を設けられて、我々の自主的な研鑽を叱咤され続けたことなどは、何をおいても書き留めておかねばならない事柄であろう。しかし、これらの点については他にも書かれる方がおいでではないかと思うので、私に関しては以下、先生の学問や、個人的にお世話になった思い出に限って綴っていくことをお許し願いたい。そして上記のノートこそ、私が先生の学問に触れる最初のきっかけとなったものであるので、そこに戻って話を進めさせていただくことにする。

\*

入学当初、平安文学に漠然と興味を抱いていた私は、躊躇なく「日本文学」コースに進むことを選んだ。とはいっても、その頃は大学で「文学」を学ぶとはどういうことかなど深く考えてもいなかったし、四年間で卒業した後については、これまた漠然と、田舎へ帰って国語の教員になれたらいいな、程度の気持ちしか抱いていなかったような気がする。「文学」を「研究」したいというような動機も持ちあわせぬまま、ただ単純に作品を読める喜びばかりを期待していた私は、一年次で受講が可能な日本古典文学関係の授業を全て取ろうと考え、その中の一つに、名波先生の「文学研究法Ⅱ」が含まれていたのだった。

当時先生は、日本文学関係の先生方の中で一番お年若でいらした。4月最初の授業で、教室に入って来られるなり学生たちに張りのあるお声で挨拶をされた御様子からは、先生が一体おいくつなのか、私には見当がつかなかった。あとで先輩から、

実際には見た目よりも上だと聞かされて、驚いた記憶が残っている。その頃からお変わりのない先生の若々しさは、おそらく今に至るまでずっと、思考の柔軟さを保ち続けて来られた故であろう。あらためて振り返ってみて、現在の私がちょうどその時の先生と同じ年齢に達していることに思い至るにつけ、隔世の感を禁じ得ない。

その授業であるが、年度初めの常として、まず講義の年間計画のガイダンスから始まった。一年の前半は「説話」、後半は「和歌」を取り上げます、という説明を受け、自分が稚い知識で関心を持っていた『源氏物語』等の物語文学が出て来そうもないことに軽い落胆を覚えつつも、(何年か後に、先生は『源氏』をも取り上げられるようになるのだが、) その「説話」が『平家物語』にあらわれる説話だと聞いて、「説話」といえば『今昔物語集』とか『宇治拾遺物語』といった、教科書に記されたジャンルとしてのそれしか頭になかった私は、『平家物語』を「説話」という観点から見ると、という発想に、極めて新鮮なものを感じた。その年の「文学研究法Ⅱ」の前半のテーマは、『平家物語』の中でも、延慶本を中心とする「重衡説話」を通してみた説話伝承論と、長門本を中心とする「師通(願立)説話」から見る宗教的祭祀と説話の関わりとを二本の柱にしたものだった。当時先生は、以後ライフワークとして追究していかれることになる延慶本『平家物語』の研究に少し前から取り組みかられたところで、ご自身が今正に取り組んでおいでの課題を、そのまま学生たちの前に披露されたのである。しかしながら、高校を卒業したてで『平家物語』といえば「語り本系」の覚一本とか流布本(といった区別すら気にかけてはいなかったが)くらいしか見たことのなかった新入生の目に、延慶本や長門本など初めて聞く所謂「読み本系」の『平家』のテキストはきわめて異様に映った。「…『平家物語』というのは、こんなにもドロドロした不気味な作品だったのだろうか。」だが、一種の怖いもの見たさとも言おうか、そのように異様だからこそ余計に心惹かれるものを覚え、また、そうした世界を解明していくのも悪くない、という思いも心に兆したことは確かである。「これが、大学の「文学研究」というものなのか…。」単に読んで楽しむためだけではなく、「研究」の対象としての「文学」。それを初めて意識するに至ったという点で、今思い返しても、先生とのこの出会いは私の人生に決定的な意味を齎したと言っても過言ではない。かくて先生の「文学研究法」は、確かに私にとって「文学研究」の扉を開く鍵となったのだった。

そして、大学卒業後も「文学研究」を続けていくことを決めた私は、大学院博士課程に進学し、卒業論文の副指導をお願いしたのがご縁で、名波先生のお世話になることとなった。先生にとっても、初めての指導学生ということで、そのことを先生はたいそう喜んでくださったように見受けられた。数多くの学生を抱えられた先生の、こ二十年余りの状況からは考えられないことだが、当時名波先生のもて指

導を受けていた学生は私一人だけで、思えば何とも贅沢なものであったと思う。その頃のお世話になった思い出と言えば、知る人ぞ知る「寺小屋語学文化研究所」で長年にわたり先生の研究仲間だった、日本思想史の山本ひろ子氏（現和光大学教授）を御紹介いただいた上、「研究所」の流れを汲む「中世精神史研究会」の末席に連ねさせてくださったこと、また他の何人かの院生とともに、私の運転で熊野から高野山、さらに京都へと研修旅行をしたこと（この時は、高野山の頂上で車が動かなくなってしまい大変だった）、京都での学会の折に、叡山文庫へと同行させていただいたことなど、一つ一つ挙げ出したらきりが無い。全く頭の下がる思いである。

だが、それほどの学恩を受けながら、私は決して先生の理想とされるような学生ではなかった。そもそも、確かに私の「文学研究」への関心は、先生の「説話」研究に触発されて始まったと言えるであろうが、後から考えてみると、それはジャンルとしての「説話集」とか個別的な作品に対してというより、現象としての「説話なるもの」それ自体への興味によるものだったように思われる。その結果、変な「方法」意識が先行するばかりで対象がなかなか定まらず、先生をやきもきさせたこともしばしばであった。今、ノートを読み返してみても、先生がまるでその後の私を初めから見透かされていたかのような、印象深い箇所がある。それは2ページ目、短いガイダンスが終わり、講義がよいよ本題の「（一）重衡説話の成立過程」に入って、その最初に書き留められた、次のような先生のお言葉である。

「文学における普遍的研究法は存在するか？——否。」

「文学研究には、作品自体が要求する個々の方法論がある。」

現在の「総合文学」は当時「文学専攻」という名称で、その頃から比較文学・一般文学・文学理論・西洋古典等を柱としていた。そうした中で、このようにまるでその「理論」を一見否定されるかのような立場を、先生は以降も折にふれて示されることがあったけれども、当初とまどいを覚えていた私も、特にやっとの思いで修士論文を完成させてからは、「作品自体が要求する個々の方法論」という考え方を肝に銘じるようになり、それが「研究法」の理論化とも決して矛盾するものではないことを理解するに至った。個々の作品に十分に向き合いつつ、そこから見えてくる「研究法」に対して自覚的であれ——。ごく当たり前のことと言えるかもしれないが、私が先生の研究を通して学び得たと考える、学問の姿勢である。これは極めて個人的な事柄とはいえ、私自身の、大学院進学後の研究スタイルを大きく左右した問題であるため、敢えてここに記し置くことにしたい。

さて、先生は学会や研究会等の席で、他の大学の先生方に私のことを紹介される折に、よく「不肖の弟子です」とおっしゃっていた。もちろん、先生としては単にありふれた謙辞を口にされたというに過ぎなかったであろう。だが、ややもすれば

細かい点に拘ることが多く、なかなか先生の示されるようなスケールの大きな発想を習得できずにいた私は、実際文字通り「不肖」の弟子だったとしか言いようがない。そしてそのことで暗澹たる気持ちに陥ることもたびたびであった。「もっと大きく、大胆に。」…書き上げた論文に目を通していただきに上がった際、何度このようなお叱りを頂戴したことだろう。先生が発表される論文の背後に、表には出てこない膨大な文献の読みの集積があることを、お側近くで拝見してきた私にとって、そのお言葉はいつも重い実感を伴うものだった。また先生は時に、学生に対して「これからの日本文学研究者は、アジアの言語を含めて、少なくとも2つ以上の外国語ができなければならない」とおっしゃることもあった。もともと、東京教育大学で中国文学を修められた後、学士入学で同大の国文学の方に入り直されたというご経歴の持ち主で、その日中に亘る広汎な知識を背景に学問を進めて来られ、先頃長逝された小西甚一先生からも「名波君は両生類」と言われたほどだった先生の、目指される先を追って行くのは、正直並大抵のことではなかった。2年前、先生の長きにわたる御指導の賜物として、漸く博士学位請求論文『「三種神器」神話の生成と『平家物語』をまとめることができたのは、私にとって望外の喜びであったが、これとても、先生が「寺小屋」時代に発表された論文『「神皇正統記」神代巻の構成と意図—天瓊杵神話を中心として—』でどうの昔に考察された内容が、研究の出発点となっている。さらに、縁あって韓国、そして台湾の地で勤務することになった私であるが、これらの地域の言語や文化的背景の在り様を自分の研究へと自在に反映させていけるようになるまでには、おそらくまだまだ長い時間を要するであろう。『文学研究論集』の月号とほぼ時を同じくして出版されることになる論文集『テキストたちの旅程』に収録予定の拙稿「延慶本『平家物語』と韓国説話—「ワザハヒ」説話と「不可殺伊（ブルガサリ）」説話との接点を求めて」は、なんとかその一端を示そうと努力したものであるが…。「もっと大きく、大胆に。」…相変わらず、これまで同様先生の厳しいお声が聞こえて来そうである。

先生の研究室に蓄積されたファイルの山の中には、新しい「文学研究」の道筋を指し示す多くの宝が眠っている。これまで私たちの指導に大量の時間を割いてこられた先生が、筑波大学を去られた後、今以上に御自身の研究のみに没頭され、どんな御成果を開示してくださるか、私は楽しみでたまらない。延慶本『平家物語』はもとより、五山文学や真言神道関係の資料、住吉・八幡信仰圏をめぐる問題など、一体何が飛び出して来るのだろうか。先生がこれからますます遠くに向かって歩んで行かれるお姿を、「不肖」の弟子は、一冊のノートを手し、いつまでも追いつけることであろう。